第7回:モデルの最適化:データ同化

モデルの最適化のためにデータ同化を用いる

グリーン関数法によってパラメータを推定する

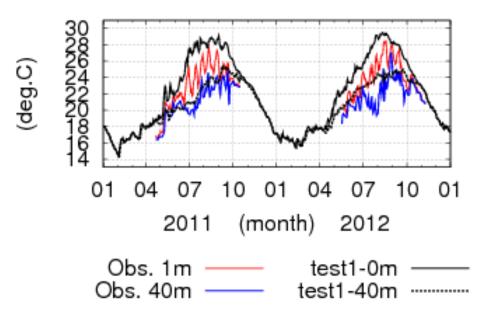
データ同化の基礎:線形不偏最適推定(BLUE)

「動的な」同化手法と、「静的な」同化手法

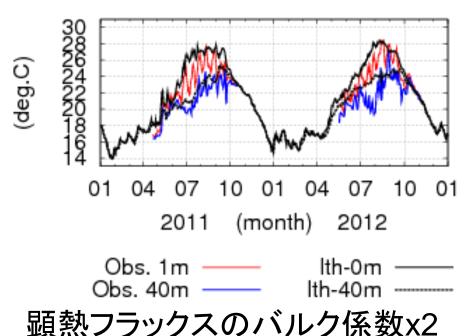
sbPOMにおける 外洋の海況を表現するための「簡易な」データ同化機能

パラメータ感度実験結果

潜熱フラックスのバルク係数x1 Shitaba

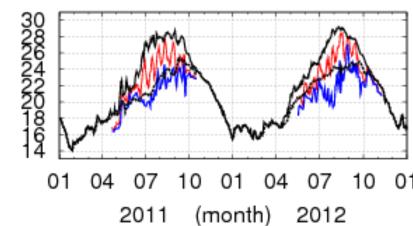


潜熱フラックスのバルク係数x2 Shitaba



(deg.C)

最適なパラメータの値は? 最適なパラメータの組み合わせは? そもそも観測と比べて「最適」とは どういう意味なのか?



データ同化:最小二乗法

初期推定値の誤差分散 P 観測値の誤差分散 r

パラメータの初期推定値 χ^f (1個であると仮定)

パラメータの最適推定値 $x^a=x^f+\eta$ と表されると仮定

観測値 y^o (1個であると仮定)

観測値と計算結果の「関係」 $y^o = H(x^f) + G(\eta) + \varepsilon$

最適な推定値はコスト関数

$$J = \frac{\eta^2}{p} + \frac{\varepsilon^2}{r} = \frac{\left(x^a - x^f\right)^2}{p} + \frac{\left(y^o - H(x^f) - G(\eta)\right)^2}{r}$$

を最小にすることで得られる

グリーン関数法

 $G(\eta)$ は、パラメータの変化 η に対して、一般的には 非線形に応答する関数である。

もし線形応答であるならば、G は定数値(グリーン関数)になり、

$$y^o = H(x^f) + G\eta + \varepsilon$$

コスト関数は

$$J = \frac{\eta^2}{p} + \frac{\left(y^o - H(x^f) - G\eta\right)^2}{r}$$

となる。このとき、 η の最適値 η^a は、

$$\eta^a = (p^{-1} + r^{-1}G^2)^{-1}Gr^{-1}(y^o - H(x^f))$$

グリーン関数の求め方

$$G = \frac{\left(y(\eta_0) - H(x^f)\right)}{\eta_0}$$

 η_0 パラメータ感度実験で与えたパラメータ変化

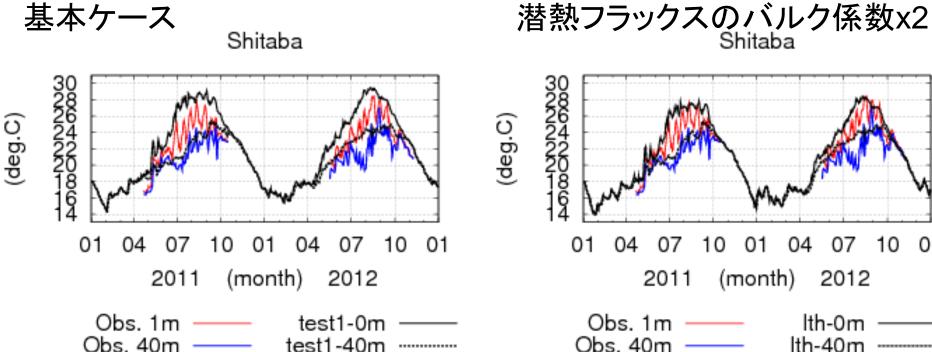
 $y(\eta_0)$ パラメータ感度実験における観測値対応結果

 $H(x^f)$ 基本ケースにおける観測値対応結果

観測値もパラメータも複数の場合

観測値の誤差分散行列R 初期推定値の誤差分散行列 P パラメータの初期推定値ベクトル パラメータの最適推定値ベクトル $x^a=x^f+\eta$ 観測値ベクトル $\overrightarrow{y}^o = H(\overrightarrow{x}^f) + G\overrightarrow{\eta} + \varepsilon$ グリーン関数行列 最適なパラメータ推定値はコスト関数 $J = \eta P \eta + \varepsilon R \varepsilon$ を最小にすることで得られる $\overrightarrow{\eta^a} = \left(P^{-1} + G^T R^{-1} G\right)^{-1} G R^{-1} \left(\overrightarrow{y^o} - \overrightarrow{H(x^f)}\right)$

グリーン関数法によるバルク係数推定



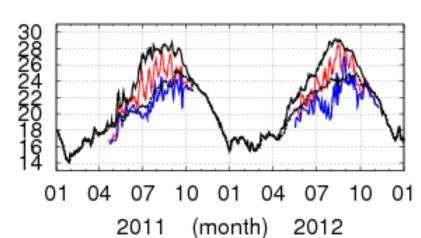


2012 lth-0m Obs. 40m ---lth-40m

顕熱フラックスのバルク係数x2

線形応答と考えれば、グリーン関数 法が適用できるはず

今回、時間切れで出来ませんでした



データ同化の基礎:線形不偏最適推定

$$h_1^{\ o}$$
 観測データ $h_1^{\ f}$ 初期推定値 $arepsilon^{\ o}=h_1^{\ o}-h_1^{\ t}$ 誤差 $arepsilon^f=h_1^{\ f}-h_1^{\ t}$ 誤差

仮定その1:解析値は観測データと初期推定値の線形和

$$h_1^a = w^o h_1^o + w^f h_1^f$$

仮定その2:観測データと初期推定値の期待値は「真値」の期待値 $< h_1^{\ o}> = < h_1^{\ f}> = < h_1^{\ t}>$

仮定その3:観測データの誤差は初期推定値の誤差と無相関 $< \varepsilon^o \varepsilon^f >= 0$

線形不偏最適推定 (BLUE)

誤差分散

$$<(h_1^a - h_1^t)^2> = w^{o2} < \varepsilon^{o2} > + w^{f2} < \varepsilon^{f2} > + 2w^o w^f < \varepsilon^o \varepsilon^f >$$

不偏性

$$1 = w^{o} + w^{f}$$

誤差が無相関 $<(h_1^a - h_1^t)^2>= w^{o2} < \varepsilon^{o2}> +(1-w^o)^2 < \varepsilon^{f2}>$

最小誤差分散

$$\frac{\partial}{\partial w^{o}} < (h_{1}^{a} - h_{1}^{t})^{2} > = 2w^{o} < \varepsilon^{f2} > -2 < \varepsilon^{f2} > +2w^{o} < \varepsilon^{f2} > = 0$$

カルマンゲイン
$$w^o = \frac{\langle \varepsilon^{f^2} \rangle}{\langle \varepsilon^{o^2} \rangle + \langle \varepsilon^{f^2} \rangle}$$

推定式
$$h_1^a = h_1^f + \frac{\langle \varepsilon^{f2} \rangle}{\langle \varepsilon^{o2} \rangle + \langle \varepsilon^{f2} \rangle} (h_1^o - h_1^f)$$

ガウス・マルコフの定理

コスト関数期待値の最小二乗法

$$\frac{(h_1^o - h_1^a)^2}{\langle \varepsilon^o|^2 \rangle} + \frac{(h_1^f - h_1^a)^2}{\langle \varepsilon^f|^2 \rangle}$$

$$h_1^a = w^o h_1^o + w^f h_1^f$$

カルマンゲイン
$$w^o = \frac{\langle \varepsilon^{f^2} \rangle}{\langle \varepsilon^{o^2} \rangle + \langle \varepsilon^{f^2} \rangle}$$

推定式
$$h_1^a = h_1^f + \frac{\langle \mathcal{E}^{f^2} \rangle}{\langle \mathcal{E}^{o^2} \rangle + \langle \mathcal{E}^{f^2} \rangle} (h_1^o - h_1^f)$$

一般化: 変分法

コスト関数最小化

$$(y^{o} - H(x^{a}))^{T} R^{-1} (y^{o} - H(x^{a})) + (x^{f} - x^{a})^{T} P^{-1} (x^{f} - x^{a})$$

H(x) が ∞ 非線形関数である場合に用いる。

H が線形関数である場合には、

$$x^a = x^f + K(y^o - Hx^f)$$

$$K = PH^T (HPH^T + R)^{-1}$$
 カルマンゲイン

カルマンフィルター

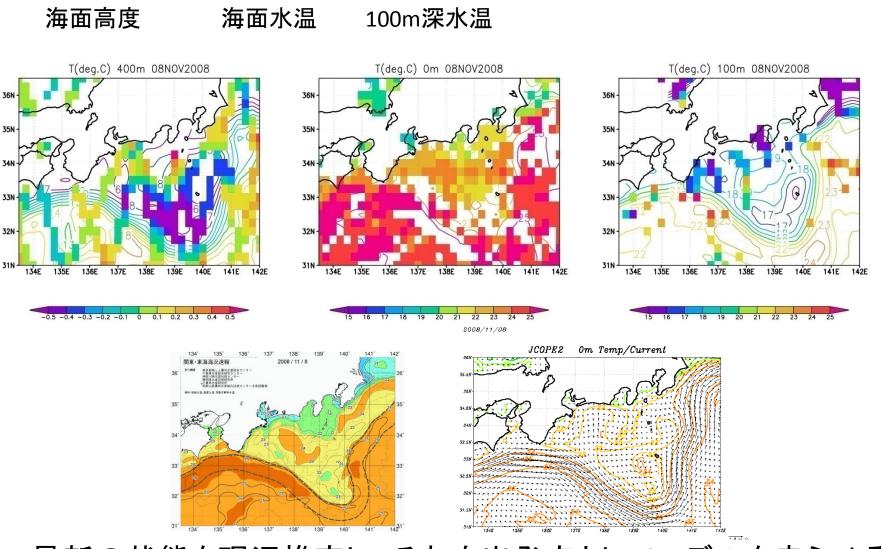
$$x^{a} = x^{f} + K(y^{o} - Hx^{f})$$
$$K = P^{f}H^{T}(HP^{f}H^{T} + R)^{-1}$$

$$x^{f}(t+1) = M(x^{f}(t))$$

$$P^{f}(t+1) = MP^{f}(t)M^{T} + Q$$

観測データを入れて現況を推定する

2008年11月8日の現況推定

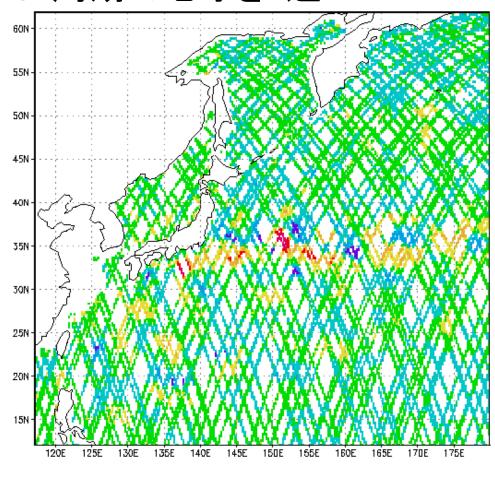


最新の状態を現況推定し、それを出発点としてモデルを走らせる。

1990年代に起こったこと 衛星海面高度の登場

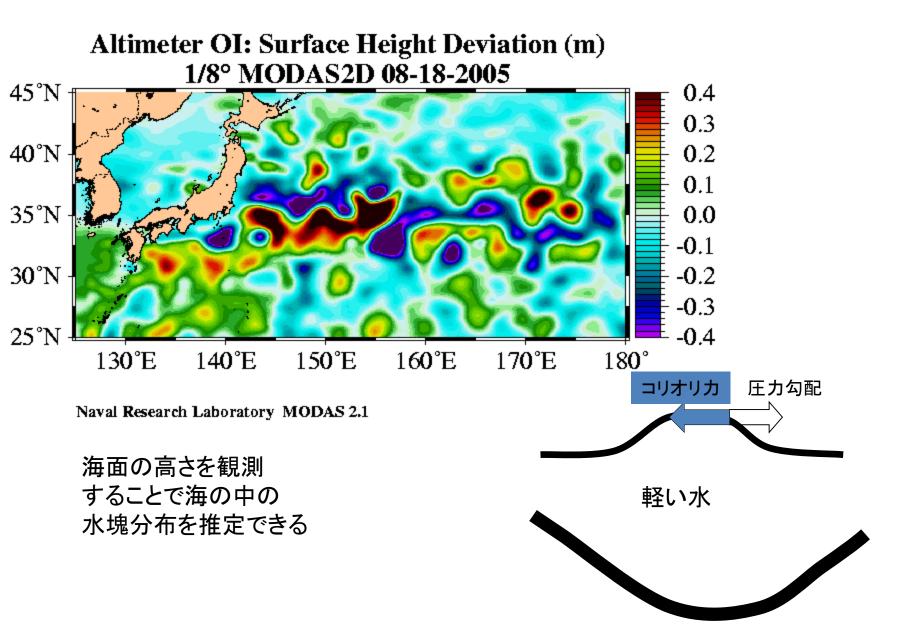
Jason-2 (NASA・フランス): 10日周期で地球を1週 GFO (米海軍): 17日周期で地球を1週



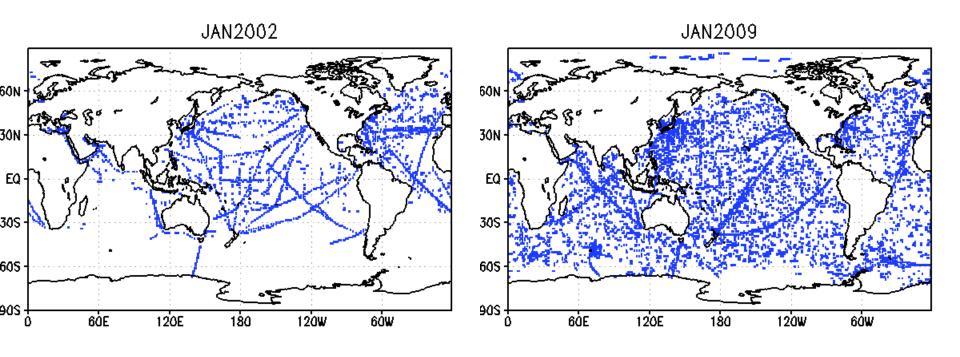


-0.2

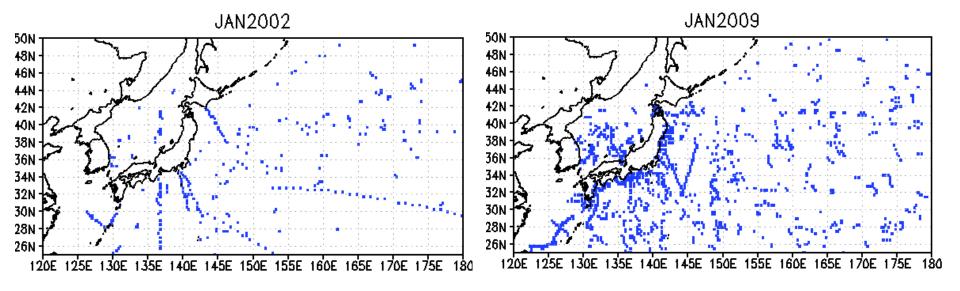
海面の高さを観測する人工衛星



2000年代に起きたこと 全球気象通信網における 海面下観測の増加

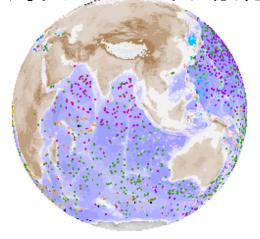


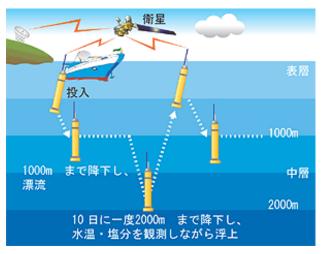
日本近海では

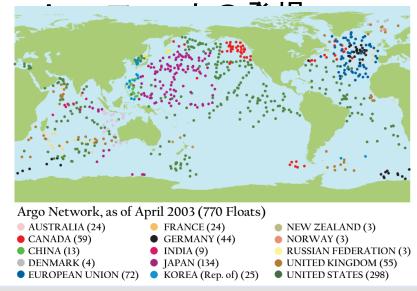


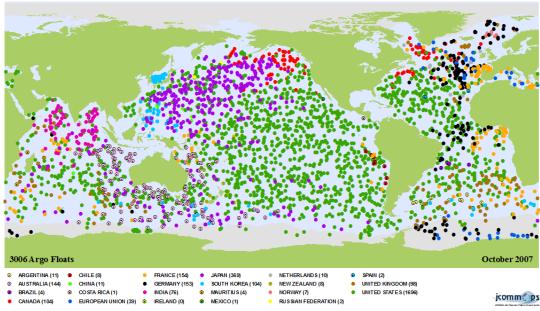
2000年代に起こったこと

海面下深層自動観測装置

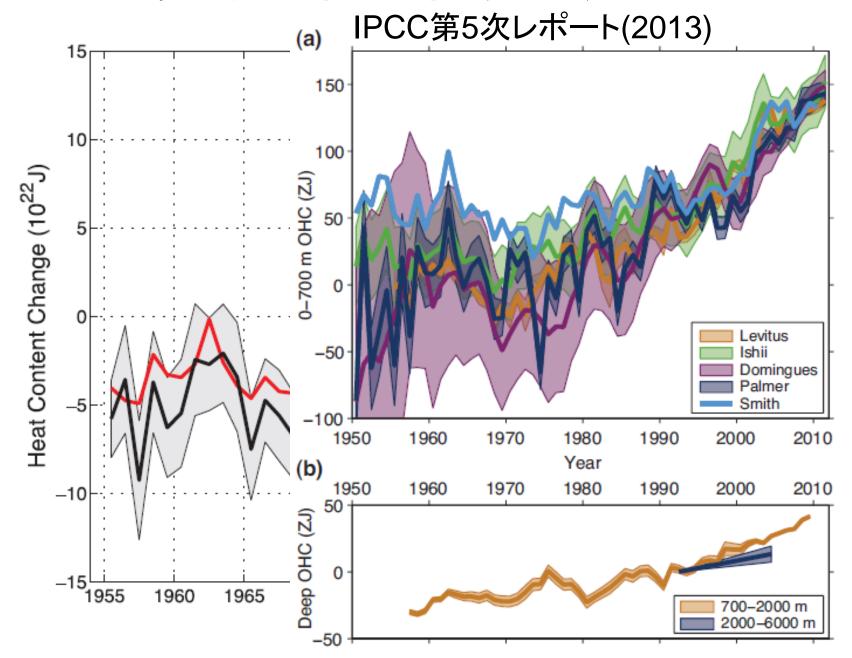








海の気候変動監視の精度が良くなった

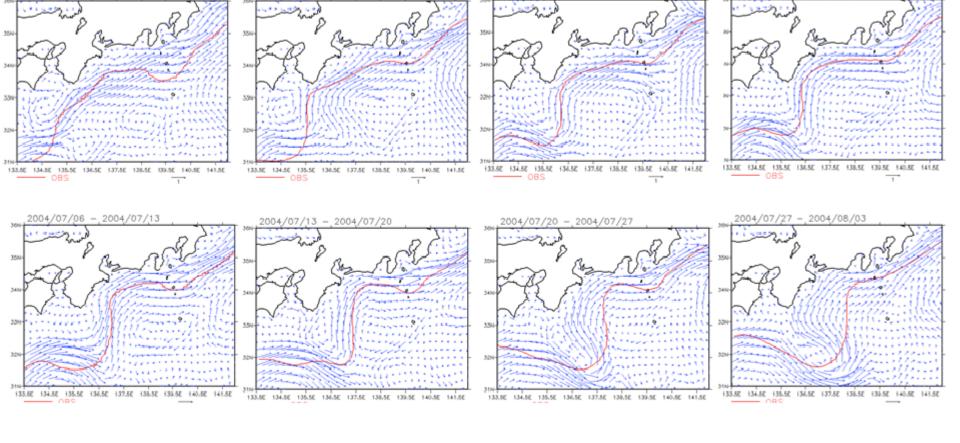


海洋再解析データ

< 2004 Kuroshio Large Meander Formation >

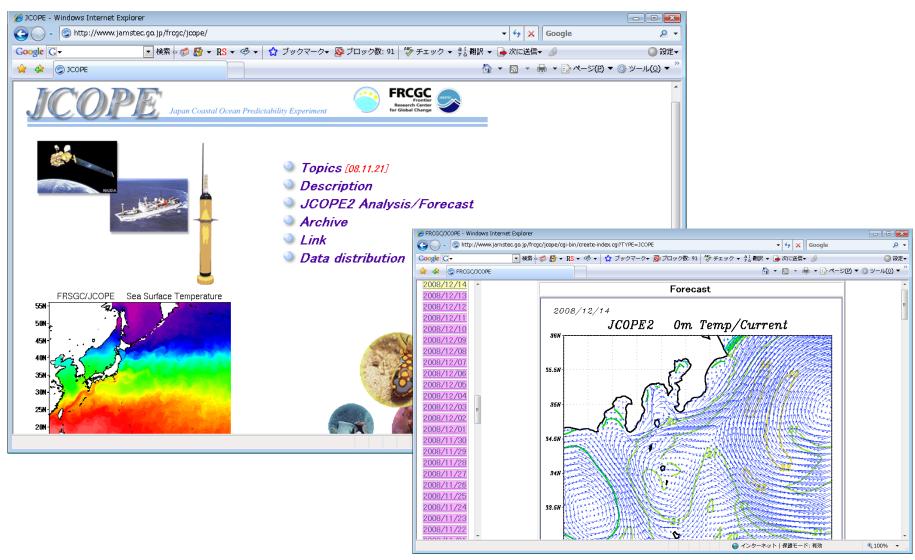
Vectors: surface current from the reanalysis

Red colored line: the Kuroshio axis positions reported by Japan Coast Guard



JCOPEウェブサイト -最新の予測-

http://www.jamstec.go.jp/frcgc/jcope/



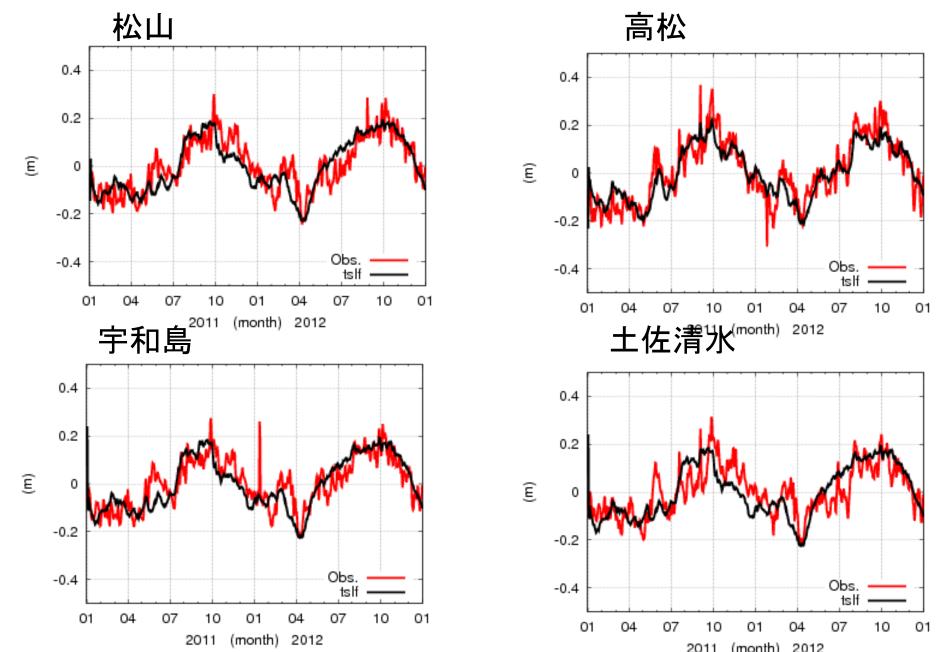
「簡易」データ同化

$$T(t+1) = T(t) + \frac{1}{2days(sec)} \left(T_{JCOPE2} - T_{lf}\right)$$

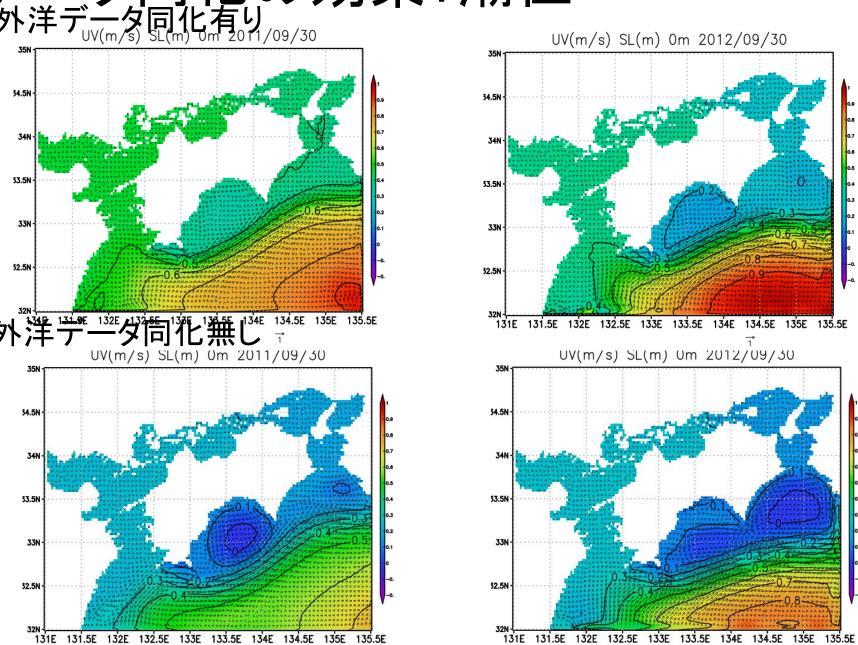
$$S(t+1) = S(t) + \frac{1}{2days(sec)} \left(S_{JCOPE2} - S_{lf}\right)$$

水深が200mより深い外洋で、再解析データに 近づくように水温、塩分を逐次修正することが可能

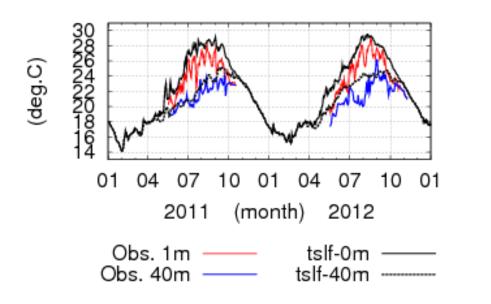
外洋のデータ同化を付加: 潮位

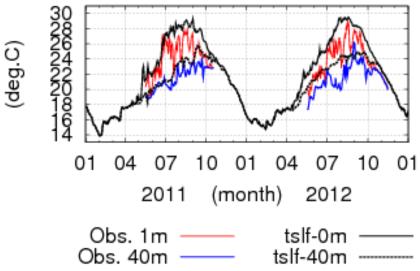


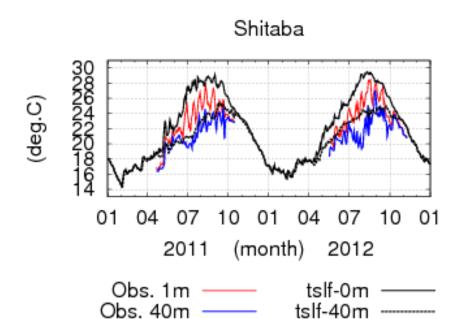
データ同化の効果:潮位
外洋データ同化の効果:潮位

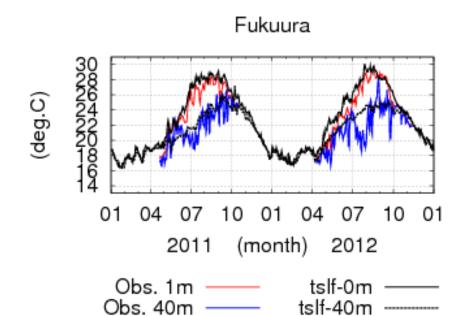


外洋のデータ同化を付加:水温









海洋数値モデリングの使い方

利用できる計算資源の増加

観測データへのアクセス

従来は理想的なモデルを使って種々の検討

現実的なモデルを使って仮定の吟味が可能に

両方重要

再解析データと予測、観測網の展開

実利用の拡大へ